

「喜びを共にする」

ヨブ記 第31章 7節～8節、ヨハネによる福音書 第4章 27節～42節

教会が建てられ、育っていくとき、そこには、いろいろな人が集まることになります。実際、そこには、さまざまな人が集まっています。その点で、教会というのは不思議なところだと言ってよいのではないかと思います。この「高知」という一つの教会だけをとってみても、いろいろな違いを持った人達が、それにもかかわらず、こうして集まって、礼拝を共にしているわけです。そして、もっと視野を広げて考えてみれば、同じ日本基督教団に属する教会であっても、さまざまな違いがありますし、日本中には、いろいろな教会があります。いや、世界中ということで考えてみても同じです。どの教会も、同じイエス・キリストを頭としているからには、教会なのであって、実にさまざまな人達が集まっているのです。

さらに言えば、それは、歴史の流れということを考えても言えるでしょう。今の教会だけでなく、昔の教会にも、そして、将来の教会にも、さまざまな人がいるに違いないのです。教会は、それほどまでに、いろいろな人達から成り立っているのです。

そういうことに思いをめぐらせるときに、私達の興味を引くのが、この朝あたえられている「ヨハネによる福音書」の箇所であるでしょう。この記事全体が伝えているのは、どうして「サマリア」というところに住む人達が、イエス・キリストを信じるようになったのか、どうして、この福音書を生み出した教会に、そういう「サマリア人」達がいるのか、ということです。同じ第4章の9節に、「ユダヤ人はサマリア人とは交際しない」とあるように、ユダヤ人とサマリア人とは、仲が良くありませんでした。大雑把な話になってしまいますが、ユダヤ人もサマリア人も、かつてのイスラエルの民の流れを汲む人達でしたけれども、歴史の荒波の中で、歩む道が分かれ、さらには、それぞれが違った仕方、(旧約)聖書を読み、信仰生活を送るようになったために、互いに受け入れられなくなってしまったのです。

イエス・キリストも、その弟子達も、ユダヤ人でしたから、キリスト教の信仰も、ユダヤから始まったと言えます。遡って、22節に、「救いはユダヤ人から来る」とある通りです。それなのに、ユダヤ人とは仲が悪かったはずのサマリア人もまた、イエス・キリストを信じるようになり、教会に加わるようになっていたのです。教会の中のユダヤ人達は、それを不思議に思っていたかもしれませんし、不愉快にさえ感じていたかもしれません。そういう教会に向かって、教会にサマリア人達がいる理由を示し、これはよいこと・大切なことであるのだと、この福音書は語るのです。

ここに伝えられているのは、そういうわけで、サマリアの人達が、イエス・キリストを信じるようになった経緯であり、サマリアの人達に伝道がなされた経緯です。それは、もしかしたら、大昔の、私達とは関係の薄いことのように感じられるかもしれません。けれども、いま、事実、教会には、このように、それこそ、いろいろな背景を持った、いろいろな方達が集まっているわけで、そうである以上、この、「ヨハネによる福音書」の第4章というのは、どうして教会は、そういう、自分を含めた、いろいろな人達が集まる場所であるのかということを見せてくれる箇所だと言えるのではないのでしょうか。そして、それはまた、教会をそのような場所にすることは何であるのか、教会の土台に何があるので、教会は、そのようなところであるのかということにもかかわるのです。

そういうわけで、この箇所に、さらに丁寧に目を向けてみたいのですが、ここには不思議なことが記されています。そして、それは、イエス・キリスト御自身にとってさえも、不思議な経験であって、

御自身も、ここから何かを学ばれたのだと言ってよいでしょう。イエス・キリストは神様なのに、そんなことがあるのかと思われるかもしれませんが、しかし、イエス・キリストは、神であられるとは言え、私達と変わらない人間になられた方なのですから、私達と同じように驚き、学び、成長もしていかれたのです。いずれにしても、ここに記されている出来事を通して、イエス・キリストが学ばれたことは、この朝あたえられている箇所では、特に、35節から38節にかけてのところから窺われます。そこでイエス・キリストは、「刈り入れまでまだ四か月もある」、また、「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」という、その当時のパレスチナの地で、よく親しまれていた言い回しを取り上げて、語っておられます。

まず、「刈り入れまでまだ四か月もある」という言葉の方ですが、パレスチナにおいては、麦などの種を蒔くと、収穫は四か月後になるのだそうです。ですから、これは、種を蒔いたばかりだから、刈り入れは、まだ先だ、ということを行っているわけです。

収穫までは時間がかかるのは当たり前でしょう。ところが、35節でイエス・キリストは、続けて、「わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」と言われます。これが、イエス・キリストが、ここに記されている、サマリアでの経験を踏まえて語っておられることなのです。

確かに、このときは、種を蒔いた途端に、収穫が与えられたのです。たまたまサマリアを通り、一人の女性に声をかけたというところから、まず、その女性に信仰が与えられ、それが、たちまちに、さらに多くのサマリア人達に広まっていき、イエス・キリストを「本当に世の救い主であると」信じるようになったのです。この成り行きには、イエス・キリスト御自身も、目を瞠られたと思います。

イエス・キリストが、そのように驚かれたのは、そもそも、サマリアという土地に、それほど期待しておられなかったからです。イエス・キリストがサマリアに行かれた事情が、第4章の1節から6節までのところに伝えられていますが、それによると、イエス・キリストは迫害、あるいは、争いを避けるために、ユダヤの地から、故郷のガリラヤ地方に行こうとされた、ということであったようです。

ユダヤ教の信仰に忠実であろうとする、「ファリサイ派」と呼ばれる人達は、イエス・キリストや弟子達の働きを快く思っていなかったのでしょう。さらに遡って、第3章で私達は、そのファリサイ派に属していて、しかも、イエス・キリストに好意的であった、ニコデモという人の話を読むことが出来ます。ニコデモは、しかし、イエス・キリストの教えが理解出来なかったようです。好意的な人でさえ、そうであったとすれば、敵対的な人達は、なおさらであったでしょう。いずれは、正面からぶつからないといけないとしても、まだ、公の働きを始めて間もなかったイエス・キリストは、このときには争いを避ける道を選ばれたのです。そして、少しでも早く、故郷のガリラヤに帰るために、本当なら通りたくないサマリアを、大急ぎで通ろうとされたのでした。ユダヤ人である自分達一行が、サマリアで歓迎されるはずがないというのも、既に、お話したように、常識でしたから、なるべく人にはかかわらないようにとさえ、思われたかもしれません。敢えて、町の外にある井戸のところに留まられ、疲れと、喉の渇きと、空腹とを覚えながら、休んでおられたのです。

ですから、少なくとも、このときは、サマリアで教えるとか、伝道するとかいったことは、全く考えておられなかったと言ってよいでしょう。ところが、休んでおられたところに、偶然、一人の女性が水を汲みに来たことから、瞬く間にサマリアに、イエス・キリストを信じる人達が沢山、起こされたのです。種を蒔いたと同時に、大きな収穫があったのです。驚かないではいられないでしょう。

期待していなかったところで、思いがけないときに、信仰が伝えられて、信じる人が起こされる。——それが、イエス・キリストの経験されたことでした。私達が、ここに、こうして、信仰を与えられて、礼拝に集っているのも、どこかに、そういう、思いがけない出来事があったからではないでしょうか。たとえ、親から受け継いだ信仰であったとしても、親や、あるいは、もっと遡った先祖が信仰を与えられたときには、きっと、そういう驚きの出来事があったに違いないのです。

もう一つの言葉、「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」の方にも、目を向けてみましょう。これは、もともとは、悪い意味の言葉でした。きょうの旧約聖書の箇所である、「ヨブ記」の第31章、7節から8節にかけて、こうありました。——「わたしの歩みが道を外れ／目の向くままに心が動いたことは、決してない。／この手には、決して汚れはない。もしあるというなら／わたしの蒔いたものを他人が食べてもよい」。自分が正しくないことをしたのであれば、罰として、自分の蒔いた種から得られる収穫が、他人のものになってもよい、と言うのです。このように、蒔く者と食べる者、あるいは、刈り入れる者とが別であるというのは、よくないことなのです。「一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる」というのは、悲しいこと・避けたいことを言っているのです。

ところが、「ヨハネによる福音書」の箇所に戻って、(第4章の)36節から38節までのところ、特に36節の最後に、「共に喜ぶ」とあるように、ここにあるのは、悲しみ・嘆きではなくて、喜びです。本来ならば、悲しいことを語る言葉が、ここでは喜びを語る言葉になっているのです。そして、それもまた、イエス・キリストが、サマリアでの出来事を通して受け止められたことであったのです。

第4章の5節以下によれば、イエス・キリストが休んでおられたのは、サマリアの「シカル」という町の外にある井戸のところでしたが、その井戸は「ヤコブの井戸」と呼ばれていました。イスラエルの先祖であるヤコブの遺してくれた井戸だということです。そういう事情もあってか、サマリアの人達はヤコブのことを大切な先祖だと感じていたようです。そして、その井戸があったからこそ、水を汲みに来た女性と、イエス・キリストとの対話は始まりました。あるいは、サマリアの人達は、旧約聖書が約束している「メシア」・「キリスト」、つまり、救い主というのは、かつてのイスラエルの指導者、モーセに代わる預言者のことだと信じていたようですが、ここで、そのことに話が及ぶと、イエス・キリストは、まさに御自身こそが、その預言者、メシアであると、はっきりと言われるのです。25節から26節にかけてのところが伝えている通りです。

そうすると、イエス・キリストが救い主であられると、サマリアの人達がわかるようになるのに、井戸を遺したヤコブや、イスラエルの指導者モーセが役に立ったのだということになるでしょう。そういう準備があったから、ここで話を通じ、信仰が起こされたのです。このように、イエス・キリストがサマリアの人達に受け入れられたのは、遠い昔に蒔かれた種からの実りであったのです。一方で、イエス・キリストが教え始められると、すぐに実りがありました。けれども、別の見方をすれば、そこにも準備があった、種は既に蒔かれていたとも言えるのです。

さらに、38節で、イエス・キリストは、このようにも言われます。——「あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている」。弟子達、さらには、教会が、キリストを受け容れる人達を得られるのは、いま自分が、さらには、それ以前の人達が種を蒔いたからだと言われるのです。そして、そうであるとすれば、弟子達や教会が種を蒔くとき、その収穫は自分達では出来なくてもよいということになるでしょう。

私達は、目に見える成果を、しかも、自分で得たいと思っています。ですから、福音を宣べ伝えるという場合でも、自分が、その実りを目にしないと、気が済まないところがあるかもしれません。けれども、イエス・キリストは言われます。自分で収穫出来なくてもよいのだ、と。さらに言えば、今は虚しいことのように思えても、しっかりと種を蒔き続けることが大切なのだ、ということでしょう。種蒔きが出来たということ自体を喜んだらいいのだ、ということでしょう。

自分が蒔く側だけでなく、刈り入れる側にもなれるのかは、わかりません。両方を経験出来る場合もあるでしょう。そして、それでよいと、イエス・キリストは言われるのです。蒔くだけでも、刈り入れも出来ても、そこには喜びがあるのです。それは、一体、どうしてでしょうか。——その答えが、34 節の、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」という、イエス・キリストの言葉です。父なる神様の思いが実現すること、それが全てだから、第一のことだから、そこに自分がどのようにかかわろうと、それはよいことであり、喜びだということです。

その父なる神様の思い・願いは、この福音書の第 3 章、16 節にある、よく知られた言葉に示されています。——「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」「独り子」、つまり、イエス・キリストを信じることで「永遠の命を得る」、つまり、救われる人、神様と、しっかりと結びつけられる人が起こされるようになるのを、神様は願っておられるのです。そのことが起こるのであれば、そのことが起こるためになされる働きであれば、そこに自分が、どのような仕方にかかわったとしても、それは喜ばしいことだと、イエス・キリストは言われるのです。それが、「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」という言葉が伝えていることなのです。

そのことは、イエス・キリストにとって、それこそ水や食べ物よりも大切なこと、いちばん大事なことでした。空腹であられたはずのイエス・キリストですが、結局、食べ物のことは後回しにされずし、あの、サマリアの女から水を飲ませて貰ったわけでもありません。彼女にしても、水を汲むことは放っておいて、町の人達に、メシア、キリストかもしれない人がいると伝えに行ってしまう。28 節以下にある通りです。しかし、それでよいのだと、サマリアでの経験を通して、イエス・キリストは受け止められたのです。ですから、ついには十字架にかかって、死んで下さるまでして、父なる神様の思いに応え、それを実現するために、また、私達のために、イエス・キリストは働かれるのです。

私達を愛し、イエス・キリストを信じる信仰を通して、私達を救おうとされる、父なる神様の熱意があり、その熱意に応じて、それを実現することを第一のこととされる、イエス・キリストがおられます。この、父なる神様の熱意と、イエス・キリストの熱意があるので、教会は開かれたものになりました。そのことは、きょうの箇所最後の、42 節に現れる、「世の救い主」という言葉に示されていると言えるでしょう。というのも、「世の」とあるように、イエス・キリストは全世界の救い主であられるからです。ユダヤ人だけのため、あるいは、いわゆる、「キリスト教国」と呼ばれている国々の人達のための救い主に過ぎないのでもありません。どのような時代の、どのようなところの人達にとっても、イエス・キリストは救い主であられ、この方を通して、私達に、神様の愛が向けられているのです。

教会は、その神様の愛と熱意によって、このようにあるのです。そうであるからには、私達もまた、神様の、イエス・キリストの、「御心を行い、その業を成し遂げること」を喜びとして、一人でも多く

の方を、ここに招き続ける者でありたいのです。実りに感謝し、また、結果を目に出来なくても、喜んで、種を蒔き続けていきたいのです。